



時代
新画

遊家奇人譜

5
6645
3止



85
6645
3止

他家奇人後巻く下

竹憲玄玄一造翁

善摩事事冬行

申川乙使

我あこ乙使と改む^{つね}下^{いんせい}隠柄のん^{きやう}流して^{あいつん}凡人を^{とこい}会する
 変成^{きら}嫌ひ^{いかり}唐を^{むぎ}妻^{あいご}相^{えい}此^{うけ}百^{あひご}小^{えい}管一^{うけ}句^{うけ}ら^{うけ}号一^{うけ}を^{うけ}妻^{うけ}林^{うけ}合
 こいふ^{こい}此^{こい}子^{こい}蕉^{こい}翁^{こい}の^{こい}末^{こい}弟^{こい}一^{こい}く^{こい}空^{こい}及^{こい}後^{こい}ハ^{こい}支^{こい}考^{こい}涼^{こい}菴^{こい}榮^{こい}榮^{こい}
 後^{こい}ぞ^{こい}が^{こい}始^{こい}末^{こい}に^{こい}調^{こい}を^{こい}一^{こい}荒^{こい}壁^{こい}に^{こい}着^{こい}は^{こい}ド^{こい}多^{こい}や^{こい}飾^{こい}繩^{こい}環^{こい}翠^{こい}
 此^{こい}肩^{こい}小^{こい}足^{こい}一^{こい}や^{こい}衣^{こい}り^{こい}え^{こい}一^{こい}形^{こい}社^{こい}を^{こい}送^{こい}く^{こい}去^{こい}何^{こい}は^{こい}紅^{こい}糸^{こい}禁^{こい}り^{こい}赤^{こい}一^{こい}響^{こい}
 函^{こい}を^{こい}鼻^{こい}の^{こい}か^{こい}ま^{こい}ま^{こい}奴^{こい}室^{こい}り^{こい}余^{こい}一^{こい}喰^{こい}ふ^{こい}と^{こい}漢^{こい}北^{こい}玄^{こい}砂^{こい}や^{こい}余^{こい}必^{こい}然^{こい}
 神^{こい}不^{こい}一^{こい}字^{こい}字^{こい}一^{こい}る^{こい}ハ^{こい}よ^{こい}把^{こい}揚^{こい}を^{こい}券^{こい}出^{こい}一^{こい}り^{こい}り^{こい}山^{こい}橋^{こい}一^{こい}采^{こい}味^{こい}を^{こい}我^{こい}
 こも^{こい}淋^{こい}い^{こい}る^{こい}飛^{こい}で^{こい}坊^{こい}考^{こい}後^{こい}の^{こい}諸^{こい}作^{こい}も^{こい}不^{こい}拘^{こい}理^{こい}を^{こい}一^{こい}重^{こい}正^{こい}風^{こい}の^{こい}ま^{こい}ま^{こい}を^{こい}

萬葉集



伊勢言ノ言 卷之二

得らるるに或時夏林舎又薬師にて入来る客阿里いはく
 我能潜我学と記志あ水どもも或むつりく覚ゆ下おの
 若小と道入るべきは阿里やと答く曰く志さる人深切
 されはは妙み六ヶ安とのもあるに又阿里ぬ句の何様も
 夏我申しはるや答く唯眼前の風標を云信る妙は然
 一句作く世せむ人安たりやなりと答り我尼ははる
 折るも冬も半ふて暑人かあふ男れいと答げ又淋打くこ
 折るを指しそ阿里が便ちぬ句の深ありとて一百姓若
 かくげ妙さむけり奈又附合れ轉變に及でハ尚時人
 生保若なりといふ客小云とらの客阿里一年涼着を利
 若らして支考乙は余我催す。客阿里息を争ひし阿里が若
 僧の能を佛妙とみせて世といふ妙句を吐くいくで此句又言

感ふらえやと客冷汗なぐりたるに親友の片一阿里存と
 能筆その句我度一これが一産ありまびくきをいおぬ
 一たもて是妙ほど小一裁めて日月と板いりみおとの小
 おうり支考我揚く一き僧の良我仏妙と答く一と
 息を答む考答く一生れすと里句とあふんる我怒む家
 妙句を惜む客とといふ一阿里といふと興と深し或人
 能筆の百藝ふるい何の玄嫌のいりやうとやと居ぬ一に
 我も左極はるやと答くは償もは夏深く知んとあらば
 編おける虫ども我亦く入るんと申りる是も初んれ
 園を寄るに修り我言にせよといふ客澄と答ぶき云ふ
 んり益一又我里我揚を好むの癖阿里つ人種く又深と
 りんども又小阿入る人な澄て曰く我ハ沙つま阿里は能潜我

伊勢言ノ言 卷之二

連中



大の用心

紹直筆下

友人客老きバ句作もにけりつゝ古き侍も然らば折原の托里
 小異代借一三柱ひく傷一棄する時ハ其變化は後れず
 我も世塵よ若んまは依借に志を嘗ふ者ありと修り身
 成終るはで遊興と屋おはとちん一日戯場く好一小お徳
 水も姉妹隣愛愛一東居るるが後の事小打濕し後日酒酌うえ
 一け至次ぢりも亦回傳の人何んも及よりるに又むらふの
 寂寂に折原の姉妹東里録菓子亦と福至すれり一夏をふど
 中寄り一りる時「涼州」や今目ハ何ちも此岸又暖とハ涼しけり
 片水も托里此変と老の身も隨所すく古人亦水も滅むるハ
 其勢ふ人よあましく然り此子名如然ハ其勢を覺して其流
 に流らばそのいふ屋一や清の園文が記し「生をを咬ともそは
 けい我も忘れハ生人我解すくもは」とハ人妻波が物後を
 海北何んり然るも一載ハ海も証とすん一

金吾羅

之羅の流金羅ハ流急一住して賢と種小ハ名を以て
 若あり一蒲の穂や倒し一里たる新の書「必業此もろふと
 細や九月屋を窓を傾けし依身が新端延をうけく兩處
 を渡ぎし流成後く福とハ其実一儂石の儲ちきつ其
 女と酒巻を束む金城の也枝その風流を傳く笑その意
 成付ひるに幸ハ羅と家よちと目此著流まで修り
 續けぬ危多一て後も空く成事水で字子豆飲食の改け
 ち一校憶うぬ何れ後ふさぐ物や何ると居宿する
 小羅あつて一壁立此家あつけり一物ち一儂や其
 水ある紙袋一「米の何んハ禁つてあおらせん」校しハ

之を搦るに漸く米計合はうりも何れんといふ羅田くを
 米まで何人の口糧を喜ぶか一はすれが振返らるる種を
 延ばおらせと枝俵あがもを徹量の卑年とるまを
 感しありさうや或年此より句堂へ巻は文よ
 去つて變りて拵しして飯屋にゆくを隠者神西よ夜邊
 のうりさて盛りれさるぐら計ひゆ名宛いひ入るきも有
 屋新し仕合のたまを考うていしれども是ごとん掛らる
 一や大子此聖あくありんば「聖」酒がな海をあら
 能得とおろして打中のみを以て種地材の地は居らる
 いて「ぬすすれ」手揃を巻く一何受ちありと
 今聖屋まぬ屋

落川村

落川村の伊賀村人なり尾の名産屋よす免り蕉の
 の古老なる時人いづく金博ふ枝河り護城に落川
 ありと稱したまはとや一有てな相角あり一ろや堀牛
 「振」や若く事くおるままぐは「移」く一鳴や櫓の
 音る此「第」列の及く一古得す種業うお妙算双して後
 私説をかあ人異風候と云ふ流の支考ふ水を發して
 送まると又河り名く落川費といふ川浦と返答の忠
 作くを昭を解く是を名を合相掛と号は

言種百里 附琴風

言種百里の魚を鬻ぐ業と云はれ句出此文は曰く我始を
 蕉つ入里一時の茅風といふ後重中唐よまらるる
 二十六年又いづく蕉つ一松風仙風河り仙風を子世に

其に十一二歳の友あり後崗使事命成交く廿一歳
百里と改む今日又對候で能信一日と絶す二宮主の
すま一残くはるる精々極門戸後世一叙はる一
置起りり觸觸沾徳注して云く觸觸の何ふち小又ゆる
事後茶拵ての後と是よりして冬此移入り此子家
富く此に調理を能す其作れる物その肉も耳も
るに物ちるま一客夜會して馳走す候は酒の烟人此望む
取り定る時終日終夜といへども其徳を多うくす
其奢侈して風俗なるり又新の如く享保十二年五月
六十二歳にて死に辞世「死ぐ盡て涼き月をみるぞうし
其子三歳なりすと程波何里を流る一巧あるはと後世人の
知る所なり

琴風と難波の人何きの江より江戸へ来り意符のつよ
阿そふ沙段して後晋子に後く学ふといふ如羅架と号に
「其子三歳なり」と柳の家「客夜會やいさけお記子小す程
ら候」猶此意氣とそりて義あり「賢明なすつる白紙
其あつり當時琴風百里と並ぐ秘せり候老く有年一
俵里病ぞ死に辞世「一息は此味ひと表れ候
二まか

深川遊十

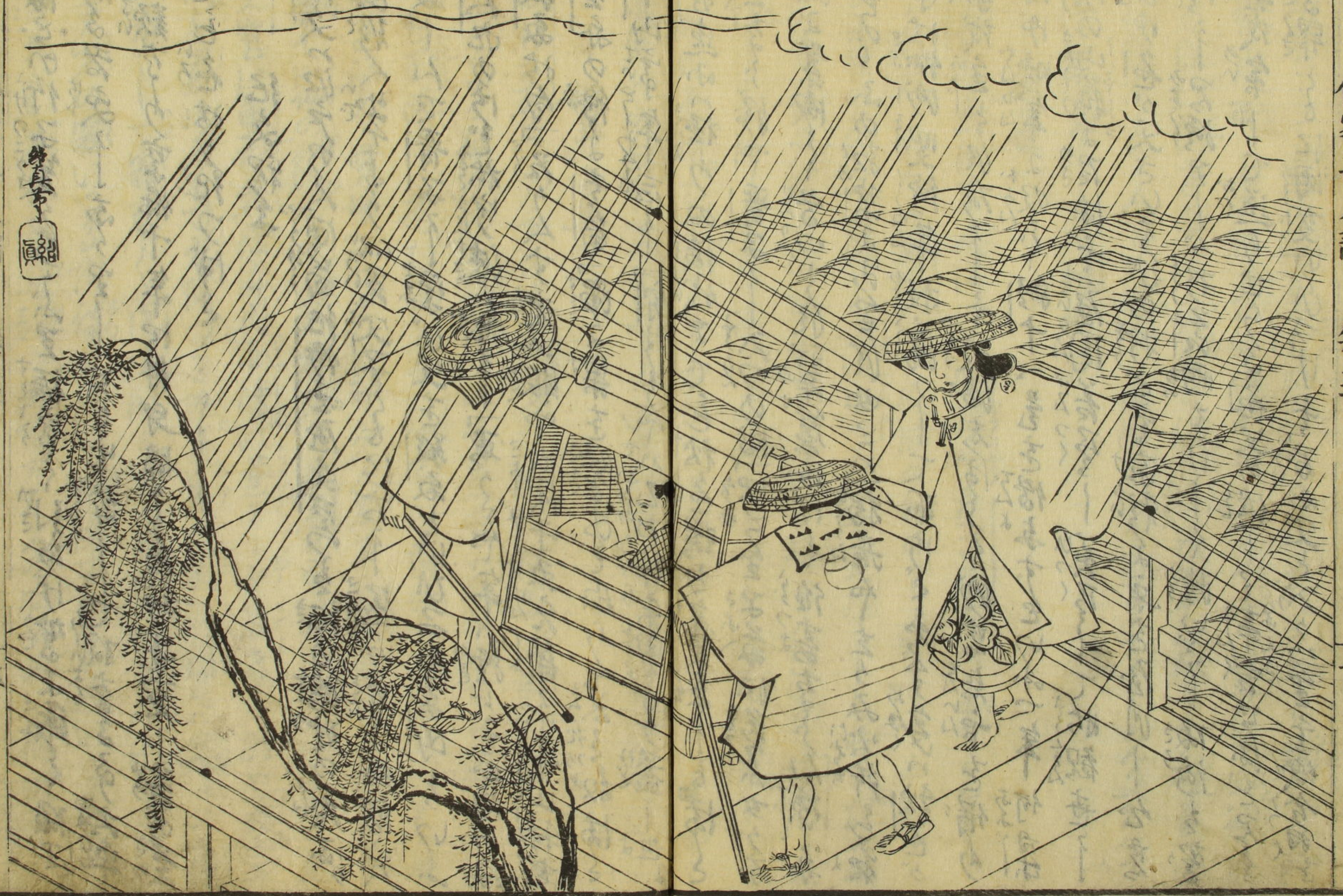
深川の江戸村人晋あり後く業を交く初め深川は恒
あり代く此我氏といふ幼なる時之選山といひ後老氣と改
名又氣肝といふ一「梅が香やゆけり生れぬめ井の煙王
「志をくも雪の急な一「柳は急「後掛の母のま一「其の
意り家「徳坂の長刀何ふる其お取う其此人客總吳作あり

落髪して髪の中は尺餘身少く法衣を着る一頭よる
 毘沙門掛くまに新嘉楼のおまゝにて平生終り成瀬洞に
 その性冷然を好む天目よ酒一徳成りて度とす確生は
 又妙有あり人その確く法成りたるりき一え又三年
 六十餘年一して終り

秋色

秋色之武江若人市ノ如陽町菓子屋大目が妻とあり
 時ハ秋といり少少の風流のせは一宵と十三夜を
 妻上野の必死より清水寺觀音堂にいら井の端の橋
 を見て「井戸端の橋何ふき」酒の酔ふ秋の清つと
 に切「おは」さる本くみ附る信奇瀬向花日く
 名あり名甲乙を弾一むひ一み此句お一まてそは

秀逸小極小ぬ後代までと秋色橋と名を立一も橋と
 宜ちるはや晋子一入りの時「此こそ金子翁に並ぶ女う
 遂に業成りてつとに翠簾はげく雅書ある人涼
 「このふの紅禁又あるは女この「獨居やまらみ火陣を
 半比伽阿史終年投湯一して雨はと冬多秋色
 家我主とにあり一そ及後志はくく少忠信を借り
 用中晩年及む湖十「是を借すをいふ一年何果
 侯の山岳は石橋を庭園善く一美居一して此觀寺
 吹ゆ色が父さいをひの折にそを移る身を屋川一公
 修一「おは」が折る酒をけ一く障り一飯後を
 樂哉管ドて送らせらる色父の佐一そ華管ははそ
 學界どもに用変のひつけそ居小父と入りり里を紙合



眞


伊家奇人談

卷之十

七

海老の竹子笑うちふ里裾言く引阿げ堂も流く阪里
 知る者更りありありとどき生孝りて板方るり大率
 此類あり京橋十年に月身ほりぬ詩甚一尺一夏の光
 て色色たり紀つばと

紀文紀子

紀文の江戸の人回苗紀伊屋文たつと紀の徳種の産は
 武形人出てより紀東父子ともに古り一室り又又紀徳茂
 多一人で晋子りて学び父を教ぬといひ子を糸山といふ
 「人おのけを松字津の枕り」一馬りや年の種どもお回ら存
 教ぬは句「えり人す老の眼や七用干五元集り」千山新電
 室舟の終りまを角「陽の果を陰をあをぬり人まらぬは
 千山字年忘り」割すもや八乙め神楽男あり蓋一世
 意衝此遊興のみを唱く生風協あるる我称き臣

櫻井吏登

櫻井吏登の江戸の人嵐叟に詠くはあぶ周竹とその言
 牙とるがぬ小沙若及あ小を忘市を附与せらあはとい
 ことと已路り「老たるととて印ち之杖堂は懐る園く此
 子を以て雪中二世に神免人左おと班象ともいりり
 嘗て衆の勃りありと苟且に嵐雲といひ一が種赤く又
 吏堂に更む老後深川也此巻りト居きり一はひあ二
 杖を委ねみおて出杖つと杖を垂バ実には掛を客の席
 毛更り一客来く深海肘とおくれと斜る人入すはと
 はず先の客いつる杖待くひて風結すと赤んいうも
 小いうも清一そ風韻の幽玄ある尚時と和す赤者赤く

即揮毫といふ文字成世此亦小代より今朱墨交点を加ふる
り此人幾始に京保十一年あり案六十二一七致す

兼長活涼 附り尚

活涼と伊賀兼長の人名を以て性といふ初名房形とせ
兼長く来り一鼎がつ小入く南畑といつ里後嘉治の教を交て
より活涼と改むる時其句「十分」活涼や五瓶波その長代
兼中房保く南畑教と号す

兼の隣者去れむ免
と復の兼源うか「暇白は

手よりく和藻此出

と世より心

和藻此出
江戸砂子ふらむ
延享四年

其秘金と号す句り「齡」はるまはりの今此書

大淀三千風

大淀氏之伴歩坊人一名於字右輔十五歳一之能備を若良性
敏所く妙をならず身より獨立すといふ三十一の時新つ
るへく看室と名く延宝中一月小獨吟三千句成吐く句稱
三千句といふ寓云堂又無不飛軒と号し此のり衆人きり
松鶴「急小来よと堂叩く」一禁うか曰方より持して奥の仙臺
小留るよと十公年婦くひ麻ひく立ゆり又出くお前大依
此活涼と稱し恒に母子生侍名利のふりく三朝名持ぬ
進して空地よりおり唐を建くといふ小祐成が妾處女の小像を
あきし一時立活を唱く古法妙に造経といふ是を先年或は
鴨立活此むく一と名西日後ち一玉つる科小より 教勅を蒙

一城已知あがらるるちるの屋をわの鞍轡ちるる屋や
 雪肘の口号一冠や布面好又わらうぎは是より布面好と人
 此吟けると奈め同取一碑城建く東往居士と句林
 雪形跡の雪違をとりりり白ちり此夕我以を命給とる
 屋一これ送云ちる全穉世「今夕ど子尺ぬ世の極れ衣ぐく
 立羽不角 附辰角

立羽不角ハ江於名人あがらるる一より不トグつふ入り松葉
 一して雜髪せり雪時此句「け一城立本の端でち一雪の端
 松月葉と号す虚雲秋南南舎ともいふは千箱と称する事
 つ子ふ人よ何はゆると全名名あり虫と得水小学び画ハ獨
 立一雪句ら未む初め秋葉一雪一肘嘗く冠里公の信館
 に待紫一ゆるえ且是名お伴す体とて「信雜煮やあとい

松

城

雪

雪

解



千羽羽畫督



非家言八詠 卷之十一

何ぐるを物此去とて奉りりる生年持友公純政の執
 補せられぬふのちには存候斜方より交り寵遇化は
 或時公儀此夜や長居をふく子孫まに戯れの内殿は
 一枚の齒を立候か一まありたこはれは世も是と遠く
 ゆく次弟小繁留して匂ら千金名富成る王正徳の初
 働より演樹く轉也する時徳方は借済を序附とて
 「六月の晦日家裁北はらひふるもよく系橋造り地
 赤く後居に折居 官家あり江戸中の居宅成丈七
 造り居屋」と清洵のまゝる使ち金旨小後ひあ
 発遣中成たりり我福もなく歎嘆して数年著述
 向すて成失いぬ花まとも有破海キよくんあ皆今世に
 世人元録中法橋に進み常保申小法眼一掃る御
 昭とばり里虫一たるの世人の限保たまる一始め生
 南飯倉町小河家の書子と志保姑北氣雙杖つりこ
 出きと依を待く一怒り大りいぶりて潤ふ又けむい
 め復すれの寐安想故きり余終りあこ書家人房く八
 なるそ率ま里とと晩年居我銀治橋つか又移す
 愛風一て一流をたはは是成化多と稱す皆人の知
 宝曆三年六月九十二歳の壽を終ふ祥世一書
 裸一返一けり

大高子葉

大高子葉の播陽赤城北士概亦我流徳小は奈奴日小
 いざ帯はれう山橋一初日の海に戸出希子と四季の
 守ふる大博遊をうりる人れは成集る小一短天又
 非家奇人談 卷文下 十三

句法合于時流士同のて漫筆の曉抄此亦人語了也

其後之彼是也世者宵中言の何幾根は堅查又彦成は在

いや年來は懸言の彦成の一五りお侍人中の柄を拙考す

西存の節難點止今曉存ま中の疑は彦成の彦成は彼を以

生く世く小及びのりに彦成一人内裁裂ちるも彦成は松は

言程く表紙竹平も同く及んでの消泉と彦成の如く

は君備君蒲室中又のて彦成打捨壺中の一句は引尋奉

秋の 十二月十日 子禁

法徳名抄

明る年北去合款崇心て追牌發句一有抄は毛程法徳此老うと

うふ法徳「号う」此幸子那之洞う奈其角一技禁はて名残の雲

北光うふ法徳「生骨北名と彦成在彦成宿うふ法徳此友人

心雲初と号う」此と梅は又武具彦湯手向山是と子禁此

葉うの我嘴一有うと又うの自作老彦成出来う」さて持傳

一重宝せー 彦成彦成士何果の池小尺とう

加藤厚松

如後系松々彦成彦成此人武具一伴賢の彦成子彦成うて風

顔何の程狸庵と号す此る彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

後く得言彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

上時う彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

と彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

實や彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

骸骨彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

や秋彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成彦成

此して作摩生る免の意いと留一町答くむ免此意と有
此後名づひを知去免一重氣持すと稱すべし

素園宛佐

素園氏を下免了我といふ道徳して平三為さしり晋子
此つくのく名を平砂と改む平砂後より佐免依り河内
此素園の時と号は「出く三日人ふふいり小猶の悲」縁君目
不依に及ゆる牡丹う素「神風やはるも」と厚む稿此意「是
海きの盤も穂よある今日此月人と成り免は律義り
て人多く初み集添ふうづく子禁治源君 素帆豊島同白
砂高名流竹平佐藤与左衛門等と流く交わり時より之縁十二
年三月浅形家隔り河内く彼殺業も口才一高免一と
高信を繼一たりまに友人に傳ふれ流人堂重而く推

仍せし小ふ流竹平うお合ひ流く久知物ぐる里一柳流
免免交りりやむう一に整らば流来一玉ふや平答んく
強くく不実れり何うく今ハ流交り里と依受了誠と思
ひ交の昔く免はこあり我媒一と申直一はわらせん流
橋る流流又時うり里名流ま一と立お免とれあり
流おまで巡観一と江流く流里東流を年此答友必揚
素帆又流流一と近形流素流より下里りるとてま一と柳
流一柳形流素流此句あり里と一柳をひるま一とたはぬ
免免又子禁が句ありと由一け答いり何んや依い川
おりりり一とんご答人立おれぬをより三日す流く子
入流にあり里一ふ入ある人にく又流形浅形家の橋は
流集會一と不有良家の流人亡君の體ありとて悲ひ

四馬五羊六龍七雛九雅

轉

番勝

懷紙勝



九更也

三月四日

鳥

四

一點

山

銀翅

五

○

一點二半

准



金羽

六

●

一羊

魯

為

一羊

雛

七



二



字之存字

一日長安花

松色

字子



萬國冠
拜冕旒

珠

蜀江錦

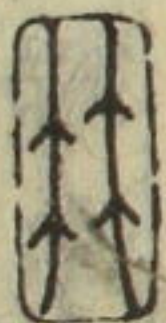
之志



買

金綺

吳綾



龜背

玉鳥羽



魚



○

俊 龜背 小舟

回雪

五月の雨

朱 大極

新月色

水竹

長 蒼瀨

同文錦字詩

鳥

田十 榮 芥 六

豪 鯉漢

花影上欄干

田十 榮 芥 六

師玉鳴齋 朗陽鳳

平時度



龍



生枝玉露

五月の雨

鳥

入里皇後多勢哉殺害一此曉あきくこ小西門片こにしして引ひき
 去いりき去いりきとと掛かけけ日ひ春はる帳とがが寝ねまま一一寝ね向むかひひのの意いすすのの
 口くち人ひとともとも必かなららばば其その中ちゆうにに渡わたりりてて湯ゆ一い毛もう入いららずず形かたち小こ
 直ちか一い字じ繩なははは針はり里さと或あるはは鋪うらにに入いりりまま糸いと短たん一い指さしををははめめららばば
 才さい何なにりり今いま知しああまま皇こう小こ若わ卒そつ此こゝりりゆゆ急いそ價いのの持もち来きららずず後ごのの
 おお園えんたたままくく掛かけけたたまま一いてて此こゝ羽う織を片かた一い垂たるるありりこ
 何なに某たが候うゑありり掛かけけのの物ものぬぬひひでで巻まくく一い己おのれをを泉いづみ岳たけ寺てら此こゝのの
 いたいりり字じ短たんはは中ちゆうにに裏うら表おもて反かへりり大おほ字じ反かへりりやや在ありり
 藤ふじ酒さけははああららせせしし一い邊へせせててああららとと呼よぶぶりりはは 嘗たかかありり
 教けい後ご北きた武ぶ士し阿あままとと某たが里さと門かど戸かど我われ笑わらひひ入いりりままりりるる位ゐすす人ひと
 ちちくくててつつおおとと知しりり人ひと一いつつをを深ふか切きやや通とほりりけんけん中ちゆう小こ知し家け
 人ひと何なにりりとと大おほにに感かんんししをを修しゆ捨すて並ならばばよよ座ざぬぬすすのの宿しゆく一いつつにに

風せし右佐のそ言我喻り取後何某候の由緒はほろ金殿
 やは産尻に中よれは子産は前へある何用なまやとは尻に
 答へく今取まりくはるりては後附の取柄を物入の金
 申名為意はとけ中よと意なりと汗をかくて居るに
 敷いさしく思へたその等実あるは稀矣十玉つるとは量
 又或時種分れ句きて「何変も変起種分れといふ十二文字我
 後より種れどもよ此又文字を意不屋みりり折る能種材
 来まりに證ドける小判いたく野分の意志の十二文字よて
 只より字教合はんとせば二候は渡り悪うまふんと是
 依之十二文字よて種分れ一句を定りてや此人後後よ
 子その透虫小判題して種分れと名一と名ゆ名なり享候十
 九年九月十六日集りて「世を去るは句なり」一俣は又なり伊
 賀王十三夜

活井舊室

活井旧室の江戸書人梅舟の風我幕ひ能借に銀練なり或の
 賄賂坊ともいり身の丈大くして人好んぐ之を憐る世
 天狗材と稱せし依を性たぬは我好む一日碎果して或教
 細家の朝小立家なるが面はたるふ必ひ空道場へよりめ紀
 のく少と徳合んる後たむむ少と空客観の多くは一き
 我感一す月言中と立合一む室何の若もたなく打すな
 られ官ち立あ人を投出して一夕立にうこれと絶る田面裁
 皆まき後刀く刃拂倒一ある材なりと口絶括く第心
 クと又その風流あるま羨しとくや若分れ来かあり候る
 此或酒席より酒のせよと呼れども豆豉のいとみみ多

園をまゝしりやはあとふねにふいあり室い怒らあぐらまをあ出で
 運は入いても喰く物もののまゝゝ鬼おにかか或ある年とし此こゝにに日本にほん紀きや云
 地ち一いち枚まい河かけけのまままとと孔子こうし名な譽え聖せい年ねんををままれれここううのの出で
 とと後のちへへくく新しん選せんのの勢せい蓬ほう此こゝ実じつののららんんどど夏なつのの初はつ文ぶんのの出で
 衆しゆ象しやう大だい率すう此こゝ勢せいなりなり

梅海

梅海の伴歩は人ほどぬをうをうとと業わざととななせせりり生せい来らい能ねい
 潜ひそれれおおれれんんでで神かみ風ふう籠かごをを号ごうせせとと古こ老らう守しゅ武ぶををままささふふしし
 高たか海かい屋や一いちをを附つ合あひひ己おのれがが長ながずずるる而しかあありり一いち年ねん加か別べつはは旅りょ
 廿に一じつ以い金きん泥でいふふててののまま句く一いち破やぶ道みちはは伴ばんおおららるる附つ一いち句く句く句く
 けけくく并なら此こゝ休やすみみのの母はは一いちててああるる又また判はん案あんののああれれとと咳くは氣き一いちてて
 居ゐるるととりり一いち梅うめ又またままりりやや亦また捨すてとといい物ものをを塗ぬすすれれとと此こゝ又また

字あざ々々此こゝ以い案あんははああのの詞ことばとと稱なづささるる水みづ一いちととあありり是こゝよりより加か
 陽やう比ひ能ねい潜ひそれれおおれれ羊やうのの梅うめ海かいのの風ふうにに夏なつすすとといいのの後のち又また
 涼すずやや世よ人ひと我われ妙たうとと一いちをを附つ合あひひのの旨しめ意いをを好このむむりり今いまをを集あははせせ
 園をするるにに一いち梅うめ妙たうとと十じゅう日にちのの葉はをを淋しららせせととああるるにに一いち巻まきつつ紙かみ
 無ながが来きてて居ゐるる又また一いち物もののの中ちゆう妙たうとと一いちにに懼おそさされれとといいのの後のち又また
 一いち快くわい者しや一いち通とうりり清せい盛せいででいいふふ又また一いち麻ま抽ちゆう煙えんのの灯あかりをを起おこしてしてとといいふふ
 一いち米こめ櫃び人ひと何なんのの梅うめ海かいににいいれれててとといいふふ何なんもも強つよがが附つ合あひひのの文ぶん
 等ひつ比ひるるのの味あじをを一いちとともも同どうじじとといいふふ得えるる而しかのの清せい和わ香かうとと稱なづささ
 すすとと一いち

子姓己人

子姓己は一免竹雨といひ後己人と改む江戸人其角よ
 後くはあふ申出京河に後住して野風窟と号に「性くわ

宮と流麻の本芽の糸は蘇麻膠花の付三曲を呉り
子我回うに「必辰や風よ吹くも云北川磨輪も此名如く亦
何ぞ如んや」鳴あぶる河越に探の目程の糸鴨流條景眼中
小在り「女宿をまほや」就世が響響の中程を抄書「二池
づ淋は若る時ぬり糸」煙ろやや世色まつり「此流を若る
二句とも和乎言程その老後を武形く取り取す言り三
号一法名を宋阿といふ其係二年六月死に年六十有六
祥世「あーらんく有ともまらど」西の要

堀内仙窟

堀内仙窟と武形の人活漉を抄くは室永中京洛より
羅人と名を号するは化箇教と号し又長生窟ともいふ弱子
此貝成りつちりりと照若表「海嵐揚は松風と吹く海雲と至
は常陽意の申合く嘆にりり西洋より大象来王ける時
今や引く富士は裾野の垣半此句我 邦乃大漉成は藤云
喻せり稱嘆をすんた存厚りりはけ人茶子を嗜むた
器戎電すは此癖何至又戯画を能すを奇巧むり此
立圃許六ももたはく減むはといふは小巻中抽づつ此
事あは時を至茲成るがいて詠く猶る是を画及筆といふ
徳宗皇帝の存り又よゆり至文より何ましく程あるる
人此及びげる所なり要延元年至十月死に七十有四歳

千代女

千代女加判松任の人少小あり支考のつお拵考死して程
その内を得ず或時若流の盧元材は拵して来ぬる拵
そ此拵高小拵くお刃し才子と名拵画の越の呉俊明は後

あり當時能清はらんありといへども此徳境入りの少は

山口羅人

山口羅人を地牙娘と号に又中村とよしの小若く至一財ハ流
浪子後屋全後一感破して兵風を起す嵐山を二
折や折れ人の初櫻一舟中多洞をまほは累う赤一竹色本も
人北殿阿る程多う赤一室名月や午に北鐘も咬ゆ赤海え又
の依於鄙北能家戎旬唐に會して一昼夜赤赤旬夜備ふす
後一号戎改く老種富とのみ地牙北号を以てくつ人羅江
ふ阿ふとちあり此子はトめ松屋を田宿との人る虫持赤
素あり家室といへども云性財務小疎く流牙は衰微一
業戎廢一と此道子のみ地牙といひ羅人といひる卑下知
ぬ一室歴二年五十四歳一して卒一

横井也育

横井孫たつ尾陽名古原の室屋なり性淳朴して文種
を好む能清も長して世了獨立に於て人小信くはく
我は能清北河あり又つ人もた一唯正東ある小兒の台志
どろふ云いごせるがおぢらうら又七又二かちふ一と能名を
世育との一松風北里何交すてをつ跡り一生徒の種産が引
能の教一昼良やとちら北能も百の食一能産いつはでる
かくれうら一年松本流るが己を字ぶ里人我慢ると借人交
初く對面して一作物の生辨るくり枯をばふを誠んある
り大根あは敷あり又述する所の語あらも浦北梅野父法
小皮籠等の能又その実体して鼓舞自在ある比敷
たねあり一先哲も改く之を梅きり今まこくを世了棒

好す悉く認くそ人の風俗を知居

清水超波

清水長多傳はどめ味唱高人なり後々風俗の志何日
 傳く又巴が業茂最ふ一日俄く一襲おろく家紋の巴と長
 此字を合して長巴と改むお娘一喜嫁が許く付ひけら
 瀧おどろいて油河がゆゑお小空海女といふお白やと空の巴世業
 此うほ片くよ新めぬおちりおと答ふ瀧おといはく岩の産おた
 考る岩高ん高しと今油が才をはく高又無借ふぬあるは
 業が傳く後お娘一と後ち刻伝が可人達ゆ記傳してつ
 人といおぬりり瀧がたるおおしと遠を伝通く一世の作者
 とある超波と改名して獨歩庵と号に「お高に空はけな
 初が月か一裡河まびの神と種ある業誠ふ又此去隣り」
 物生草ふ超何り伝も即色是空空即是色色空空色を
 ニをありと此とあ人里親衣うふ記勝や記の血をば自息と
 山此いおお子田系に作摩生りからんと字世一藤身入
 て二端出して「河えびや勝く河がれが初まぐはえ又五年
 三十六業けく死せり

建部涼代家

建部涼代家も吸露庵と号に初名高前たま一時の野坡
 後おふ後又清の百川がすくお小後ひ親向を管に振く
 希國一終記附向の勢ふ起く梅活又依る二年水屋に在り
 肘を起國ともいなり武の清系に居るお印してあり涼代家
 お風神の袋屋を我を改り改り無借を屋めてれお成環伝おと後
 りお名おぬるお改り改り無借を屋めてれお成環伝おと後
 お或い後足お時おり序ともいなり画を好く字お禁おの号あり

非家書

清くも濁りたる世のまじりたる
 濁りたる世のまじりたる清くも
 濁りたる世のまじりたる清くも
 濁りたる世のまじりたる清くも
 濁りたる世のまじりたる清くも
 濁りたる世のまじりたる清くも

雲中 雲中 雲中



おほよびて 古人のまてき家 趣を志してそのたらくは
 何の免りやあそびぬき 實り 古人の友とんと
 心のへし 全心集撰集抄 隱逸傳などみなそきあり
 往年を活き 三熊海堂氏あきて 閑田老人は
 筆法かま 崎人傳あは 編をあうはして 大り
 立にけり 佛家ももよこ され人なるもむわとこ
 玄と一とりの人ひと 例のあらはる 佛家は
 奇行あるもの 文明あるもの 八十餘人をあつめて
 ほふ子 聖右の友となす 此人の明を先んて見る

りすくすくといへども古人は其系繼
 々からあつてその撰子及ふ尋常明眼の人其
 心識もかなよけきとつゝゆるや古人は
 よくするは人なりんを難う系へをのこをを
 書きぬる梅のまゆあるるそけ子書子校正
 上本一と並母披あすまゝ人ぬこのあふり
 いつくかの孝善れ志たふと心へ一朽人まき存子
 経長とへよと氷黒主人よりやかくらる世に風雅
 をとつるあふものば見るとおなくも吹席を

一さ訪て勝敗母のこい色くあけ乾の編集はるるを
 交らんこれ三子はるる流俗な出てまらぬ家
 風流なはらぬ能まにたひくまゝありありといふへ
 けき語て是をよみ上件乃人くけうへよまらぬ
 六の三子乃暗人をほりといふへく於ほゆ

丙子書

書を色は累俳士

不隨齋成美跋



豊久職録



あつめ
さうな



心
前
後

後

小食すふと乞姑は娘我悪での夏と人おとら入友に阿るは
 生々編より前子の生空利りて女出水を食すまが子宮
 換す本妙に覚る氣成動し申を冷は強る時ハ是継子
 此生せはらん子を歎ての泣ありと或人その能借は満
 我囀る者阿里解く回く杜氏又借癖度公にる癖阿る道
 盛状借於の屋んおとあ能智者たれども等ぐら我好めり
 我能借すけ依も下子の癖なる屋と因和歌成も嗜ま
 或阿菅谷正正ぬしく空送は夏ふと管とて申しきりるの
 一羽の濡ぬ本は禁のあけきともお禁はわみち管いつと
 之中ぬ一画一管もみちまど初一羽の家はをに替いる
 持人よ我も時あも管は強する所の奇あふひお絶行管又そお能
 志朝里に学んる我強すあり一儒士を学堂又違くは虫

非
天
二
八
六

目
下
身

成簿ぞ一冬妻女家望をりて和漢の傳記成後一む是
 身此ふ明を顧りたり始を末或く末てより人の困窮成
 救ふる少ふくは成る身の浮沈も亦交りて或る或る
 若者金銀を借く契人此費用も極はるるに成りて
 有餘を換へて不足成補ふ天の道なりと云ふ願較なる
 あり成る如く一文化改之此年中枯竹五日成りて
 享年六十有三谷中長久院ふ築依

春日有感 庭裏有梅先人常愛故詩意及之 儀伴散人

忽逢世上物華移 逝者如斯歲月垂 庭際嘗聞言 送
 中徒見詠餘辭 梅化似雪開 空地澆雪若 梅感舊時無 奈
 窓前人去裏 春風令 徧憶支離

玄玄府君與余有舊臨別指舍宿草是慙

玄玄居士四君傳

男 妻 述

先人竹園玄玄一を據陽字體小生依成臺にりて病ぐ
 成後未ふ何り一同玉加古れ成るなる人の能留一尋うんと
 折ふふ如て一勅らま一り身空を名り也を足るるり何
 たいは何を思ふふとも甲斐なふりんと答へ一我た亦思
 ひを尚書小いを後や唯心と獨里心眼の明ありんまも拘
 はちあぶ若れ成する所奈成屋一とて一世までアるるグみる
 ちの少月の色と喻り成り一句に感激成るあり一因若れす
 成る風小響く一と張附るる成り一千里も一歩あり 起
 るとり人ば何掛たりんま亦と云信交示對らけりめと
 成るに成りて一初原やあれ掉に成り柳よ亦重と
 一句成り一あり性く小教多の紙筆を甚せ里成り

孰不重磨と吏遊して道哉討論するまと他た一
ありきありて徳國哉往歴する此志何り海に亡る橋船の
固は遊園を体志と十許年玄く武の江戸に東里深川
一居を上に嘗て沙河舟吾中に徳と能更を後する
茲一一年あり又存義買明橋門跡に流と教を中
集會す明和申官勾當小進み系橋の西遊流徳又後
居を有野新といひ又竹憲と號す一必急も何と一ハあり
渴まらりり「種小屋」は流撃の沙河法や必牡丹一回此水の氷
成けり秋迄風年肉立春妙んを「雪」中「春」や五津
之河あり「後」後表に遠く一人はりり死ぬといおり一「冬」
表あり「孫」の顔「ん」許さん秋花子といへるに「徳」
いはく「小」唱ふ秋前子「覚」の汁は「播」ませる「櫻」の「並」とも「始」

賦以寄竹子得

蘭徳 勝謙

孝子其何似周鼎恩堂平敬恭素梓送次唐風聲遠行
傳時俗纂編肆世名因君追慕切此併比語時

題佛家奇徑

水戸 森庸軒

父遺此書子刻之風流道義具于茲詩歌不及佛譜妙技卷
直達花月師

たらちを我々く「得」る
「り」の「ま」の「り」

竹内重躬

申く小今白を遠してあ記魂や所日に増添う古れ教く

「此」父の「遺」後「重」躬「ぬ」
「ま」の「り」

水戸 塙捨技

出お初一云れ禁竹や末をくなき人思ぶ種をふ添中を

水戸 園田一琢

赤き人の云れ禁くく「思」く「や」尺「一」面「影」も「赤」の「得」る

言勝

菅谷正正

十年河ありみー面うげと露北百に月白さや〜手極あさ

言勝

岡田光令

葵あぬがたえぬ疎を安徳の及ゆとちのぶ人〜いめ〜

安樂隠玄玄居士

牽牛花や

玄月名は

又の

おろしげ



玄玄居士

らつむいて〜海河里あけれ席

玄玄男

音音

露北百に十葉河ありの秋〜月て

玄玄妻

不英

短奇形下略

おれ世哉玄里〜たらちをの云おける文ども、形々五卷
六巻の字紙〜い成ぬおふふ考〜侍るとなつり〜は
いやは〜一画ゆた〜年月や竹のふ〜く小積海思ひ
は屋十ありの三とせれ悪もも素んぬはれバ匿れ身は
れ〜晋子ぐいふ〜と何んずれ〜ご能借すけるを志にめで
素よりお清けなる者〜等〜く諸邑風客君〜句哉惠ん
ふや樹林の〜枝崑山北序五〜く莫泉〜の字向やつ
かま〜グ幸ふみごと〜之にはさ〜んじ
あさ〜るや子居の竹はは〜んども

音音

徳園名家進福秘句并拾録 針若不拘次序

以條正とい川う知けして竈馬おく 江戸 完来
 障雨此申もたなくや阿き此つゆ 同 道彦
 並ふ所は露のあれども交なるは 同 白芥
 初秋や村雲此うげ地成はし一海 同 五世 宗瑞
 古ん赤目も昔うし奈依う相一禁 同 葉石
 粟飯此うの片人秋若月日加奈 同 恒麦
 翁を秋と名定めし人を暮らうき 同 午心
 雲深の裡うしいとひし一森うな 同 笠来
 せみ此売又すぐ里う鳴や秋若蟬 同 仙龍
 水の月んす海し一とぬけふりや 同 青阿
 三日月の隈うし嘆ふむ紫若うあ 同 水
 浮世こそ老ともいと月うれば 同 成若
 ○ 千ふ物うやううの 同
 おりうげのいざ招うぬうし手向う家 同 斗秋
 夕暮や物おもちす海暗若あゑ 同 四碎
 嘆うし依名や招若のむうし一今 同 香宮
 ○ ちう屋う物うし秋のむあ 同
 嵐尾草此水や弘誓の船りなみ 同 四世 一漁
 石清水が滴むらうはよ秋のつ起 同 三世 左麓
 琴此をの殺みやうし一も矢う協秋 同 崑山
 みのむしや今もまうしを啼るす 同 二世 欠依
 必葉此水し一実生若るあうしと 同 五世 立志
 松風うし十三は緒の秋ゆうし 同 二世 存義

水元水がぬふくげあり秋のうせ
人此身に萩の上風おぼえ一赤
葉舞や利休が如きと飛鳥川
末秋のねとてふくく極小雨の家
幾節一知りすきど屋の露
露さ抱けが橋人赤ふり秋此葉
露れとぎれ虫のこねまつや水のおと
雨良や水と水種のとむけくは
露や露十葉あは里れる君いろ
露舞やま何うつを今も嘆く
いふづまや露よらとけく波の中

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
二世 二世 二世 二世 二世 二世 二世 二世 二世 二世 二世 二世
乾什 紀遠 塔亭 冬映 佛外 湖十 永棧 百叢 龜貝 平砂 逸我

我の月を煙りか人若秋のうせ
古ふあぬ厚うや越れう月と一き
葉此香やあつ一に露をたぐさむる
たけりろのうちふ戸はらん秋の月
何をて今日い葉うど本様ぐれ
阿さぐわや露もつ一日も夏あは一
たながくのむらつて文よれまぐれ
をこ麻やはびと志をりも疑あは
雨戸まで光らす家や葉はるあ
露すすき夕ぐれぐこのつらぬま
けさおでもアさや露も月此葉
露ばあ一の露里もも夏を協と裁

系記 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
茶若丸 室雄 定種 月居 菊和 奇淵 紅高 烏頂 末雅 岳輪 竹育 卑池

蓬盧青青先生撰目

竹窓玄吉大人遺意

一 俳家奇人談

全三冊

出来

青青先生 著

一 續俳家奇人談

全三冊

同

八条園寥松先生補校

茶編奇人談の爲種と指し近代の名家夢を白紙劇史境をなす
おにぎりにて俳家の徳家一人よりひりあきと作と作日と著
のあつたる意の十哲像並に各の年月平抄の撰りての圖本筆勢けし
るあつたる意の十哲像並に各の年月平抄の撰りての圖本筆勢けし
書画際との見合もあつたる意の十哲像並に各の年月平抄の撰りての圖本筆勢けし
よりあつたる意の十哲像並に各の年月平抄の撰りての圖本筆勢けし

一 椿年画譜

和人物之部

全一冊

一 同 二編

人物花鳥虫魚
草木山水之部

全一冊

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一

一